

【 復活のトロパリ 第6調 】



てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、
天使軍爾墓あ現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか
番兵死し者のごとし、マリアは墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね
に立ちて、爾の潔き體を尋

た(り)。なんぢはぢごくにいざなわれず
爾は地獄に誘

して、ぢごくをとりにし、いのちをた賜
して、地獄を虜にし、生命を賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。
もう者として、處女あ逢給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは
死り復活せし主よ、光榮は

なんぢにき
爾に歸す。

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】



しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等同座なるもの、ちゅう

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實にして神智なるハリストスの役者、せい

なるしんにえられたるふえ、ハリストのあい
なるしんにえられたるふえ、ハリストのあい

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
満 器 我 國 光

し ょ う し ゃ 、 あ し と し ゅ き ょ う せ い ニ コ ラ イ
照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た め 、 お よ び
爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
全 世 界 爲 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
三 者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
光 榮 父 子 聖 神 歸

せ い せ い し ゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

く に な ん ぢ を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 な ん ぢ は は じ め わ が く に に お い て お の
爾 初 我 國 於 己

れ を が い ら い し ゃ と し り た れ ど も 、 ハ イ ス ト の
外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんちのて敵
光と暖かきながし、なんぢのて敵

きをぞくしんのことな爲し、かれらにか神
きをぞくしんのことな爲し、かれらにか神

みのおんちようをあたえ、ハリストのきょうかいをたて
みのおんちようをあたえ、ハリストのきょうかいをたて

たり、いまこのきょうかいのためにより
たり、いまこのきょうかいのためにより

たまえ、けだしわれらそのしよしはなん
たまえ、けだしわれらそのしよしはなん

ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ

べよ。

【 復活のコンダク 第6調 】

いまもいつともよよ世に、アミン。
いまもいつともよよ世に、アミン。

いのちのげんいたるハリストかみはいのちを
いのちのげんいたるハリストかみはいのちを

ほどこすてをもってしせしものをくらきた谷
ほどこすてをもってしせしものをくらきた谷

によりいだして、ふくかつをじんるいに
によりいだして、ふくかつをじんるいに

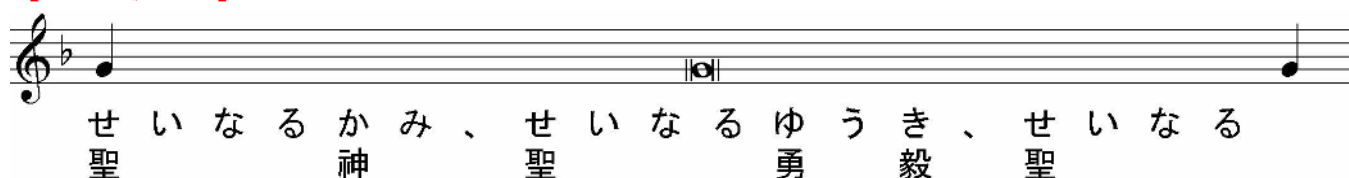


司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有
 となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾
 り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に
 痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が
 聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる
 ものとなしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の
 仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈
 と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖
 なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】





じょう せいの ものよ、 われらを あわれめ
常 生 者 我 等 憐

けよ。 せいの なる かみ、 せいの なる ゆう き、 せいの
聖 神 聖 勇 毅 聖

なる じょう せいの ものよ、 われらを あわれめ
常 生 者 我 等 憐

めよ。 せいの なる かみ、 せいの なる ゆう き、
聖 神 聖 勇 毅

せいの なる じょう せいの ものよ、 われらを あわれ
聖 常 生 者 我 等 憐

めよ。 こ う え い は ち ち と こ と せ い しん
光 榮 い は 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せいの なる じょう せいの ものよ、 われらを あわれ
聖 常 生 者 我 等 憐

めよ。 せいの なる かみ、 せいの なる ゆう
聖 神 聖 勇

き、 せいの なる じょう せいの ものよ、 われらを
毅 聖 常 生 者 我 等

あわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

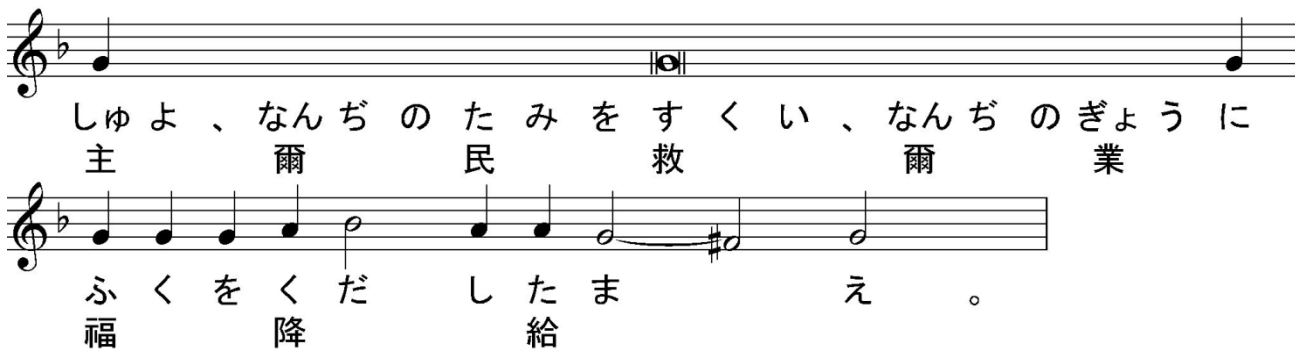
【 プロキメン 提綱 主日第6調 】

司祭) ^{つつし} 慎 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{だいろく} プロキメン、^{しらべ} 第六の調、^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾 ^{たみ} の民を救い、^{なんぢ} 爾 ^{ぎょう} の業 ^{ふく} に福 ^{くだ} を降し給え、^{たま}



誦經) ^{しゅ} 主よ、^{われなんぢ} 我 爾 ^よ に呼ぶ、^{われ} 我 ^{かため} の防固よ、^わ 我 ^{ため} が爲 ^{もだ} に黙 ^{なか} す母れ、



誦經) ^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾 ^{たみ} の民を救い、^{すく}



【 アポストロス 使徒經 176 端 コリント後書4章6～15節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん} コリント人 ^{たつ} に達 ^{こうしょ} する後 ^{よみ} 書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄 ^{くらやみ} 弟よ、^{ひかり} 暗 ^て より光 ^{めい} の照 ^{かみ} ることを命 ^{われら} ぜし神 ^{こころ} は、我 ^{てら} 等の心 ^を を照 ^{せり} せり、^{ハリス} イイス

^{おもて} トスの面 ^{かみ} にある神 ^{こうえい} の光 ^し 榮 ^{ちしき} を知 ^{もつ} る知識 ^{われら} を以 ^{かがやか} て我 ^{ため} 等を輝 ^{しか} さん爲 ^{われら} なり。然 ^こ れども我 ^は 等は此

^{たから} の寶 ^{つつ} を土 ^{うつわ} の器 ^{おさ} に藏 ^{ばくだい} む、^{ちから} 莫 ^{かみ} 大 ^よ の能 ^{われら} が神 ^よ に由 ^{ため} りて、我 ^{われら} 等に由 ^{しほう} らざらん爲 ^は なり。我 ^は 等四 ^は 方

より患難を受くれども、窮せず、險しき境に處れども、望を失わず、窘逐せらるれども、棄てられず、倒さるれども、亡びず。常に身に主イイススの死の状を佩ぶ、イイススの生命も我等の身に顯れん爲なり。蓋我等生ける者は、常にイイススの爲に死に付さる、イイススの生命も我等の死すべき肉體に顯れん爲なり。是くの如く死は我等の中に行い、生命は爾等の中に言うなり。然れども録して、我信ず、故に言えりと、あるが如く、我等も此くの如き信仰の神を有ちて信ず、故に言う、主イイススを復活せしめし者は、イイススを以て我等をも復活せしめ、且爾等と偕に己の前に立たしめんことを知るに因る。蓋萬事は爾等の爲なり、豊かなる恩寵が、多くの人の感謝に由りて、神の光榮の溢るるを致さん爲なり。

(比較用 口語訳)「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである。こうして、死はわたしたちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのである。「わたしは信じた。それゆえに語った」としてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じている。それゆえに語るのである。それは、主イエスをよみがえらせたかたが、わたしたちをもイエスと共によみがえらせ、そして、あなたがたと共にみまえに立たせて下さることを、知っているからである。すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。

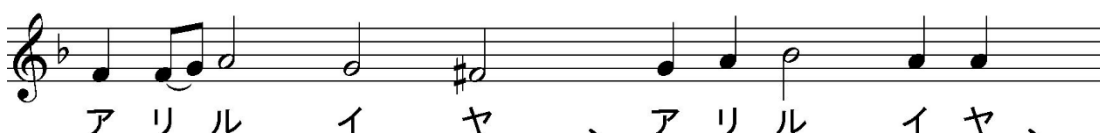
【 アリルイヤ 主日第6調 】

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、





誦經) ^{しじょうしゃ おおい した お もの ぜんのうしゃ かげ した やす}
至 上 者 の 覆 の 下 に 居 る 者 は、 全 能 者 の 蔭 の 下 に 安 ん ず、



誦經) ^{しゅ い なんぢ われ かくれが われ ふせぎ われ たの ところ われ かみ}
主 に 謂 う、 爾 は 我 の 避 所、 我 の 防 禦、 我 が 頼 む 所 の 我 の 神 な り と、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し}
人 を 愛 す る 主 宰 よ、 我 が 心 に 神 を 知 る 智 慧 の 淨 き 光 を 輝 か し、 我 が 思

^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ}
念 の 目 を 啓 きて、 爾 が 福 音 の 教 を 悟 ら しめ 給 え、 我 が 衷 に 爾 の 福 た る 誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ}
を 畏 る る 畏 を も 入 れ て、 我 等 が 悉 く の 肉 體 の 慾 を 踏 み、 凡 そ 爾 の 喜 ぶ

^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ}
所 を 思 い 且 つ 行 い て、 屬 神 の 生 活 を 過 ぐ る を 致 さ せ 給 え、 蓋 ハ リ ス ト ス 神

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし}
よ、 爾 は 我 が 靈 と 體 と の 光 照 な り、 我 等 爾 と 爾 の 無 原 の 父 と 至 聖 至

^{ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}
善 に し て 生 命 を 施 す 爾 の 神 と に 光 榮 を 獻 ず、 今 も 何 時 も 世 世 に、 ア ミ ン。)

【 ^{エヴァンゲリオン} 福 音 經 マトフェイ福音書92 端 22 章 35～46 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん}
睿 智、 肅 み て 立 て 聖 福 音 經 を 聴 く べ し、 衆 人 に 平 安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ}
マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) つつし き か とときひとり りつぼうしかれ こころ と い し りつぼう うち
謹みて聴くべし、彼の時一人の律法師彼を試みて、問いて曰えり、師よ、律法の中
に何の誠か大なる。イイスス之に謂えり、爾心を盡し、霊を盡し、意を盡
して、主爾の神を愛せよ、此れ誠の第一にして大なる者なり。第二は是に同じき
もの、すなわちなんぢとなり、あい おのれ ごと こ ふたつ いましめ ことごと りつぼう
者、即爾の鄰を愛すること己の如くせよ。斯の二の誠には悉くの律法
と預言者と繋がり。ファリセイ等の集りし時、イイスス之に問いて曰えり、爾等ハリスト
スの事を如何に意うか、彼は誰の子なるか。曰く、ダヴィドの子なり。彼曰く、然らば如何
ぞダヴィドは、せいしん よ かれ しゅ とな いわ しゅわ しゅ い なんぢわ みぎ
坐して、我が爾の敵を爾の足の凳と爲すに迄れと。然らばダヴィド彼を主と稱うれば、
いかん かれ そのこ ひとり これ ことば こた あた こ ひ あえ またかれ と もの
如何ぞ彼は其子たる。一人も之に言を答うる能わず、是の日より敢て復彼に問う者な
かりき。

(比較用 口語訳) ひとりの律法学者が、イエスをためそうとして質問した、「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」。イエスは言われた、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」。パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった、「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。すなわち『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。イエスにひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。





※聖体礼儀③ 〜